

《研究ノート》

果てしなく遠い迷いの道 ——立教大学と私——

播本 秀史

はじめに

1971年4月に立教大学に入学した。高校を卒業したのは70年3月。その年の4月から大阪で万国博覧会が開催されていた。大学受験に失敗した私は万博を見ることもなく、ひとり故郷の徳島を後に上京した。予備校に入るためだった。予備校は早稲田大学の正門近くの早稲田ゼミナールというところだった。

早稲田に入りたいという願望があった。第二学生会館が立派に建てられているのに閉鎖されて使用されていないことや、正門あたりにたくさん並べられている立て看板を見ながら予備校生活が始まった。

私は商業高校（徳島商業）出身であったので、実業高校出身者や基礎力を充実したい生徒向けのクラスに入った。

目黒の大鳥神社の近くに下宿があった。賄い付きの3畳の部屋だった。予備校の帰り、明治神宮の芝生にひとり坐って、眺めた新緑をよく覚えている。傷心と不安と希望を抱えながら。

秋になり、早稲田の大学祭があった。大隈講堂前の広場で学生たちが「都の西北」を歌いはじめた。私も一緒に歌おうと誘われた。しかし、輪に加わらなかった。早稲田の学生でないということもあったが、憧れているなら列に加わっても別に不思議ではない。現にその歌を完璧に歌えたのだから。しかし、私のなかに歌いたくない「こだわり」があったようだ。郷里で抱いていたイメージが薄れ、違和感が生まれはじめていたせいかも知れない。

とはいえ、一応、早稲田を受験した。ただ、どこでもよい、ともかく早稲田に入りさえすればいいという受けかたではなかった。文学部のみ受験した。不合格であった。クラスで私と成績を争っていた人は政経学部合格した。ただ、その人は立教の経済学部は不合格だった。受験の巡りあわせとでも言うべきものを感じた。

予備校時代、とても衝撃的な事件に遭遇した。私はそれを予備校の中で知った。三島由紀夫が市ヶ谷の陸上自衛隊駐屯地の総監室に乱入後、割腹自殺したというものだった。1970年11月25日の事件だった。

1. 立教大学入学

実は、予備校時代、一度だけ立教を訪れた。まず、その静寂に驚いた。思えば、予備校の隣は、拡声器から出される喧噪に満ちていたのだ。ワイリアムズ像も見た。大隈のそれに比べるとずいぶん小さかった。当時の私は大隈像には違和感があった。なにか威張っているような感じがして、どうも好きになれなかった。像を建てること自体への違和感もあったのかも知れない。

立教大学が受験候補として浮かびあがってきた。私は哲学・思想系の勉強がしたかった。高校の「倫理・社会」でキルケゴールを知り、その人を研究したいと思った。ただ、純粋に哲学を勉強したいなら哲学で有名な大学という選択肢もあった。高校卒業の時の受験でも迷ったが、敢えてその道は選ばなかった。その当時の自分の可能性をできるだけ伸ばしてみたいという願望とまだ成熟していなかったせいであろう。

立教大学文学部キリスト教学科に入学した。複雑な思いだった。銀メダルをもらったような気持ちとでも言えようか。

入学式

入学式はカルチャーショックだった。総長が式辞を述べようとしている時、突然、ヘルメットをかぶった学生が乱入した。おまけにタバコを吹かしての登場だった。そこから先は覚えていないが、たぶん中断となったのではなかろうか。詳しい背景など知るよしもないが、話があるのなら、ヘルメットを脱いで話をすべきだし、タバコを吹かしてなど、傍若無人の行為ではないかと、共感できなかつた。まだ、学生運動の余波があったようだ。

この道は……

一浪してともかく大学生になれた。喜びがなかったと言えば嘘になる。けれど、心は晴れなかった。しかし、一条の光が心に差し込んだ。もしかして、自分はよい大学に入学したのではないかと思わせてくれる言葉に出会った。「フレッシュマンハンドブック」に次のような言葉があったのだ。

この道は君が選んだ道、果てしなく遠い迷いの道、全力を尽くして迷いたまえ

2. 1年生（学業の日々）

1年生から専門科目の履修をした。幼少のころから中学生になる前まで、日曜学校に通っていた。年の離れた従姉が教会でオルガンを弾いていて、日曜学校の教師役もしていたので、自然と通うようになった。それと、キリスト教がブームの時代だったのか、近所の子たちもたくさん通っていた。クリスマス劇にもサマリア人役で出たりした。中学生になっても折にふれ聖書は読んでいた。高校時代も教会に行くことはなかったが、神はより近い存在になっていた。

これまで、一度も書いたことはないが、ある神秘的な体験をした。高校生の時だった。求めよ、捜せ、門をたたけ、という箇所を読んだ時、求め

ます、たたききますと祈って眠りについた。たぶん、夢のなかだと思っただが、白い服をまとったあるものが私の膝くらいの位置に、宙に浮かぶように立っていた。祈った後でのことだったので、神が現れたと思った。不遜にも、顔を見たくなくて眼を顔に向けた。その瞬間、顔の部分だけ、激しく光った。ものすごい閃光だった。恐れおののいて、ひたすら、許しを請うた。その後のことは覚えていない。たぶん、赦されて眠ったのだろう。私のこれまでの人生でもこういう経験は一度だけの瞬間だった。しかし、今なお、その瞬間は反復している。私にとって、人間を超えた存在があることは真実である。少なくともその存在を疑うことはない。まだ、洗礼は受けていなかったが、当時、神は心の中にいました。

さて、専門科目の履修である。キリスト教学科の勉強はどこか様子が違っていた。何か信仰は棚上げして、学問として、キリスト教に向かっていかなければならない印象がした。親しかった神が遠く感じられた。神と、どこか冷めた関係性に身を置くべきである、というような気持ちにさせられた。現代哲学も勉強できると入試要項にはあったが、私の求めているものとは違っていた。どこにも私の心の拠り所がなかった。どこにいるのか、どこに向かえばよいのか。心が分裂したような、宙ぶらりんのような、どうしようもなさを感じていた。

退学勧告

1年生の途中から、大学にほとんど行かなくなった。クラスメイトで後に不幸な死を遂げるY君が心配して目黒の下宿まで訪ねてきてくれた。「播本、君は大学やめるのか、東大でも受け直すのか」と友は言った。その頃だったのか、大学から徳島の実家に「退学勧告」の書簡が届いたらしい。親の心配と怒りに乗って、くだんの書簡が再送されてきた。このまま在籍してもとても卒業は出来ないのうんぬん、という旨が書かれていた。ただ、この件は学生たちの抗議があったらしく、大学が勧告そのものを撤回

したようだった。私も友の忠告が効いたのか、少しずつ、専門科目を中心に出席するようになった。

学年末に学科科目の各人の成績が教務の掲示板に張り出された。今とはかなり景色がちがう。不思議なことにすべて A をもらっていた。まだ、S はない時だった。級友たちは驚いたようだった。自分の中に勉強する内的必然性がないまま、あるいは希薄なまま、成績だけがひとり歩きしていた。

3. クラブ活動 (YMCA)

YMCA に入部した。同学年のキリスト教学科のメンバーが何人も入ったが、ほとんど私が誘った人たちだった。1年生の夏休み、下北半島にある牛滝集落を訪問した。奉仕活動や地域の子供たちとの交流に加え、私の提案で「宗教意識調査」をした。深い質問ではなく大まかな宗教に関する意識を聞いたように思う。また、青年団の方が船を出してくださり、海から仏ヶ浦の奇岩を見学した。また、卒業した先輩からパウロの「ガラテア書」について学んだ。何かの合宿の時だったように思う。また、日常では、E. フロムの『自由からの逃走』などを研究した。今から思えば充実したクラブ活動だったが、当時はなにか日常のけだるさ、マンネリ、おしゃべり、サロンの雰囲気には飽き足らず、2年生となる前後から距離を置き始め、ほとんど顔を見せなくなった。

ある先輩との会話をよく覚えている。S先輩とって日本文学科3年生の人だった。「播本君は将来、何になるの?」「さあ、学者にでもなろうかな」と答えた。本気なのか冗談なのか、なぜ、そのようなことを言ったのか、実のところ自分でもよく分からない。「そう、4年になってその言葉聞きたいわ」とS先輩は言った。2020年3月、大学を退職するにあたって、言葉というものについて、様々、深く思う。

4. 2 学年（かつお船）

大学で学ぶ意味を見出せないまま、2 学年となった。ある若者向きの男性週刊誌を見ていたら、「カツオ船、マグロ船に乗ろう」という記事があった。そのなかの、「南十字星も見える」という文字に強く惹きつけられた。海外旅行や留学が今のように一般的でなかったから、タダで南十字星が見られて、その上、けっこうなお金も稼げる、らしい。正に一石二鳥だと思った。クラスメイトで清水出身の N さんがいた。父親が運送会社を経営されていて、かつお船関係者とも交流があるらしい。その伝手でかつお船に乗ることができた。

サラリーマン家庭に育った私にとって、全く異質の世界に飛び込むことは、冒険であり、一種の賭けでもあった。焼津から出航したが、その前に、東京から故郷の家に電話した。電話口で、「なんでそんなことをするの、やめることはできんの？」と母に泣かれた。しかし、空虚な現状を何とかするため、やめることはできなかった。ただ、万が一に備えて、父母への手紙を机の引き出しに残した。

夏休み中、25 日間の漁を終えて再び焼津に帰ってきた。航海中のことは明治学院大学教職課程論叢『人間の発達と教育』17 号（私の退職記念号）に書いたので、ここでは航海日誌のように付けていたノートに「帰ったら高校の教師になろう。卒業までに剣道 2 段を取ろう」と記したことだけに留めたい。

5. 3 学年（剣道の日々、他学科履修）

2 年生から 3 年生になる春休み目黒から保谷に転居した。7 月から剣道を始めた。「三挙動」という基礎からはじめて、9 月に初段を取った。大学の部活ではなく近くの町道場に通った。保谷の道場だけでなく十条にあった道場でも稽古した。その頃の私は、剣道によって生が支えられていたように思う。

一方、学科の勉強は全く疎かになった。ただ、立教のカリキュラムに他学科の履修を認める制度があった。卒業単位として、一定の単位まで認められるのだ。日本文学科の授業を多く履修した。国語学と書道の単位が取れば、国語科の教員免許も取得できる位だった。特に小田切進教授の漱石ゼミは興味深かった。2年、3年、4年と連続して履修した。YMCAの先輩から、小田切ゼミは評価が厳しいと聞いていた。そのうえ、学年末、レポートに加え試験まで課せられる。ハードルの高いゼミだった。受講生もゼミというより講義科目かと思うほど、学生が集まっていた。発表の機会はなかったが、たいへん勉強になった。漱石の作品をキルケゴールの例の三段階、美的・倫理的・宗教的段階と関係づけて考えるようになった。これは、後に「明治学院論叢」で論文にまとめたことがある。

同じく日文科の授業では野口定男教授が印象深い。3年で「史記」4年で「杜甫」を学んだ。人間というものを多面的・多角的に学ばせていただいた。また、太平洋戦争に関し「日本が悪い悪いとみんな言うけど、ほんとにそうか。経済史を調べてほしい」と涙を流しながら私たちに訴えられた。このような授業を受けたのは最初で最後であった。

キリスト教学科で印象深い授業は、中沢洽樹教授のゼミだった。ヨブ記に関する授業だった。この時、中沢先生はモチーフを「主想」とおっしゃっていた。グループを組みヨブ記に関する発表をした。一生懸命に調べ上げ発表したつもりだった。しかし、「まあ、これはメモですね」と微笑みながらの講評をいただいた。学問の奥深さを感じとった。

6. 4 学年

依然として、剣道に打ち込んでいた。10月に2段を取得した。かつお船での日記のひとつが成就した。高校の教師の道はどうなったか。

実は、3年から教職課程の履修を始めていた。当時は、3年からの履修でも免許取得の可能性がゼロではなかった。現在の教職制度は1年から高

い目的意識をもって計画的に取り組まなければ免許取得は不可能となっている。このような制度には懐疑的である。師範学校化している。戦後の開放性教員養成の危機である。

「**全力を尽くして迷う**」学生が、教員になりにくくなっているのだ。

さて、履修をはじめたが、どうも、なじめなかった。自分で記した言葉だが、どこか、教員になることへの抵抗感があった。なのに、なぜ、「高校の教師になろう」などと書いたのか。また、「学者にでもなろうかな」などと話したのか。今もって謎なのだ。しかも、ふたつとも実現したことも、不思議な思いがする。

いったん始めた教職の勉強だったが、2回か3回出席したきり、放棄してしまった。しかし、4年になり、教務の掲示板に教育実習予定者として、私の名前があった。その掲示板に「教育実習生といえども、生徒を指導する……」とあった。「指導」という言葉が突き刺さった。この私が？「指導」という言葉が遠く感じた。

教務部に放棄した旨を報告に行った。「霞を食って生きる」わけにはいかないなので、会社訪問をはじめた。ある金融機関に内定した。教員の道は完全に断たれた。はずだったが、これでいいのかと煩悶した。内定は辞退した。

7. 教職聴講生

なんとか4年間で卒業した立教大学に、教職聴講生として続いて通うことになった。75年4月から77年3月まで在籍した。剣道ばかりやっていたので、大学院に行く学力はなかったし、学部・学科編入試験も難しいと聞いていた。また、そこまでして勉学する対象も意欲もなかった。大学に

残る道は教職聴講しかなかった。

ある授業がきっかけとなって、教職の授業に取り組む姿勢が変わった。ひとつは、半田元夫先生（立教では非常勤講師）の「社会科教育研究」の授業だった。マッカーサーの「農地解放」が日本の再軍備防止と関連していることを教えられたのだった。歴史の見方を教わった。もうひとつは、柳原光教授の授業だった。当時、JICEの所長もされていた。「キリスト教教育原理」と「宗教科教育法」を受講した。宗教科教育法はJICE研究所で行われた。車座的に並んで様々な教育法を教わった。「KJ法」などもその時に知った。この授業に惹かれたのは先生のお人柄も大きかった。学年末のレポートは400字原稿用紙で200何枚か書いて提出した。日本人の精神史とキリスト教との関係に言及したつもりのレポートだった。教務部の方に「卒論ですか」と聞かれた。学問に対する意欲が湧いてきた。

中・高の宗教科教員免許状と、同じく社会科教員免許状を取得した。東京都立高等学校の社会科教員としての採用されることになった。聴講生修了の時、教職課程・教務課の方たちが、食事会・飲み会を開いてくださった。教員採用試験の合格者対象の会だったかも知れない。たしか、普連土学園に合格した方も隣にいらした。教職課程スタッフのKさんは学生のことを本当によく知っておられた。教務課のOさんは、窓口で私のレポート提出が何秒か、何分か遅れたので受理してくれなかった方だった。しかし、その席で私のことを、ずっと気にかけてくださっていたことが分かった。

8. 高等学校教員（2度目の聴講生）

東京都立烏山工業高等学校に赴任した。1977年4月だった。ここでも大きなカルチャーショックを受けた。何と3年間で300人が退学するのだ。各中学校の「ツツパリのエリート」が集まる学校だった。もちろん、真面

目な生徒、おとなしい生徒、可憐と思えるような生徒もいて一様ではない。しかし、当時、社会をにぎわせた暴走族を彷彿させるような生徒、目と目が合っただけで暴力行為に走る生徒、アフロヘア、リーゼント、髪の毛の生え際に剃りを入れ、眉毛を細く剃っている生徒、目つき、立ち居振る舞いの荒々しい生徒など、相当の猛者がいたことも確かであった。

大量の退学者が出たのは、留年を認めない内規を作ったからだった。留年した生徒がクラスの主みたいになって、クラスをかきまわして結局やめてゆく。それで初めから留年を認めない内規となつたらしい。体育科のT教諭が日本教職員組合の沖縄教育研究会で、退学者のその後をレポートしたことから、マスコミに大きく取り上げられた。『いま学校で・高校生1〈底辺・頂点〉』（1979、朝日新聞社編）という単行本もあるので、興味ある方はお読みいただきたい。

この現実直面して、私も真剣に、教育とは、教師とは、学校とは、を考えるようになった。いろいろ、教育書を読みはじめた。そのうち、上田薫先生の本に「出会った」。

『ずれによる創造』『絶対からの自由』という、およそ教育書らしからぬタイトルが付いていた。立教大学教授とあった。

週1回あった「研修日」を利用して、上田先生の「教育哲学」と「教育方法」を2年間、受講した。2年間学んで、自分も教師やってもいいんだ、と思えるようになった。「教育とは不完全な人間が不完全な人間にかかわる営みである」この言葉は、私の第2のバイブルとなった。

9. 大学院生活（教授群像）

2回目の聴講生を終えて、1985年4月から立教大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程前期課程に入学した。大学卒業から10年後の入学だった。高校教員は続けていた。当時はまだ、それが出来る余地があった。大学院時代、学問のおもしろさを実感できた。現場にいたからこそ、一層そ

う思えたのだろう。大学の先生とも個人的な関係がより近くなった。例えば、中野光教授のゼミの後は必ず近くの中野店に行って全員で食事をした。このゼミには後に教育学科の教授となる前田一男さんはじめ、小熊伸一さん、佐々木尚毅さん、菅原亮芳さんたちも出席していた。後に皆さん、教授になられている。なお、この方たちは寺崎ゼミでも一緒だった。室俊一教授のゼミも楽しかった。特にゼミ後の夜の大学院（飲み屋さん）での構想豊かな先生のお話しは「絶品」だった。寺崎昌男先生（東大教授）のゼミには青学や東大の学生も参加していた。このゼミでも先生行きつけのお店で何度か一緒させていただいた。先生に「東大の先生らしくないです」と申し上げたことがあったが、先生はその言葉を喜んでくださった。浜田陽太郎教授のゼミは、ゼミ生全員が緊張しているようだった。私も何かの発表のとき、「播本よ、反動と言うなよ」と、独特の言い回しと眼の輝きに接し、緊張が走った。私の発表の際、何かの事例に「反動」という言葉を使ったのだ。ただ、その時、教育社会学の学的スタンスを学んだように思う。安易に価値づけ、意味づけをしないで、資料、データーをして語らしめるというスタンスである。松平信久教授は背筋が真っ直ぐで、いつも凛とされていた。学生のよいところに沿って鷹揚に指導されていた。お殿様然とでもいうのだろうか。山村賢明教授は筑波大学から来られたばかりで、ある種の固さと迫力を感じさせられた。それが、だんだんと柔和になってこられた。立教の「水」がそうさせたのだろうか。後期課程の予備論文の口頭試問では貴重なご助言をいただいた。武藤文夫教授は上田薫先生の弟子でいらっしゃる。その関係で私にも目をかけてくださり、現場教員を中心とした自主ゼミでもご指導いただいた。教育学科の草野球チームで、立教のユニホームまで作ってプレーしたことは忘れられない。藤田昌士教授には「教育方法特講」でご指導いただいた。ちょうど、校内暴力やいじめが中・高で問題とされている時期だったので、それらの問題を考察した。先生の緻密な調査と丁寧なご指導が印象に残っている。

さて、上田薫先生である。前期課程の2年目から非常勤としてご指導い

ただけることになった。ゼミでは各人が興味あるテーマを発表し、その後、メンバーが自由にディスカッションし、最後に先生のコメントがある、というスタイルだった。

私たちが気付かなかったことや、独自の角度からのコメントがあり、驚きとともに多くのヒントをいただけるゼミだった。

ここでは、受講した先生方を中心に書かせていただいたことをお断りしたい。この時期は学問というものが少し分かりかけてきた頃で、楽しんで研究に励んでいたように思われる。思えば、すでに故人となられた先生方もいらっしゃる。ご指導いただいたすべての先生方に、改めて感謝の意を捧げたい。

10. 後期課程

修士論文は上田先生に関する論文を提出した。「知られざる教育の発見」というものだった。後期課程では新井奥邃（1846 - 1922年）に関して研究した。幕末から大正まで生きたキリスト者、教育者である。予備論文をもとに『新井奥邃の人と思想—人間形成論』（大明堂、1996年）として上梓した。キリスト教学と教育学に関する学びがここで活きた。後期課程では教育学専攻の先生方とともに、キリスト教学科で受講した、鈴木範久教授のご指導も仰いだ。後期課程は6年間在籍した。学生として立教在籍期間は学部4年、教職聴講2年、上田先生聴講2年、前期課程3年、後期課程6年で計17年間であった。

11. 非常勤講師

上田先生に付いての学部聴講2年間、大学院の9年間を含めた都立高校の教員生活20年間を終え、1997年4月から明治学院大学文学部教職課程に奉職した。ほぼ、同時に、立教大学学校社会教育講座の非常勤講師となった。以後、研究休暇（サバティカル）の年度を除いて2017年度まで同講座ならびに教育学科の非常勤講師として勤務した。ざっと数えて20年間

お世話になった。68年間のこれまでの人生のうち、37年間を、立教大学と関わってきたことになる。これからの、このキリスト教研究所の所員としての日々を加えると、立教とともに過ごす時間はまた増えていく。

非常勤講師の立場から接してきた立教の学生は、私の拙い授業であっても、その良い所を受けとめてくれた。その心映えに支えられ授業することができた。授業は教師と学生の合作である、と実感した。よい学生に恵まれればよい授業となる。しかし、教師の責任から逃れるわけではない。よい学生となるよう、教師の働きかけも必要だからである。

ただ、全ての学生という訳ではないが、答える力はあるが、問う力は弱い印象があった。学生は、分かりやすく細かく、何から何まで教えてくれることを欲していた。全てを教えないから空白を学生自らが埋める、それが学ぶことの醍醐味のはずなのだが。こちらが料理したものは食べるが、自ら料理しようとししないのだ。ひたすら受け身なのだ。材料は提供するので料理をしてほしい。いや、材料そのものも、学生が自分で見つけることを期待した。現実問題これは難しいが。私は肝心なところは、わざと教えなかった時もあったので、先生は何も教えてくれない、なにを勉強しているのか分からないと一部（大部？）の学生には不評であった。断片から、学生がそれらを自分なりに統合してくれることを望んだが、なかなかうまくはいかなかった。けれども、わたしのやり方を理解してくれた学生には有意義であったかもしれない。しかし、これは立教の学生に限ったことではないが。

リアクションペーパーを見ていると、授業を通して、自分の至らないところに気づいたとコメントする学生がいた。その率直さ、素直さに将来の可能性を感じた。

一方、どこか尖っている、どこか勘違いしているような学生もいた。そ

れが素敵に思える場合と逆のそれもあるが、いずれにしろ、極めて貴重なことに変わりはない。それも途上にある者の自分探しの一環であろう。「迷う」時期はさまざまな起伏がつきものである。

自分の至らなさ、不十分さに気づくことは、一種の自己否定である。「迷う」ことも同じであろう。自己の相対化ともいえよう。自己の「不完全」に気づくことである。

勘違いしている時期は自分が優れている、完璧である、と自信たっぷりのようだが、実のところ、不安でいっぱい、あるいは憂鬱感、焦燥感に苦しんでいるはずだ。司馬遷が「始皇帝喜ばず」と『史記』に記したのは、このあたりの消息と関係しよう。

喜ばないまま、突き進むと、その道は死に至る。それは、人間はいずれ皆死ぬが、今ではない。生を回復するため人間は「迷う」ことが必要なのである。「迷う」ことによって、自分の進むべき道をそれぞれが発見するのだ。

教育の最後は自己教育に至る。教師は自分自身が不必要となるために、教育という営みを紡ぐ。

12. クリスマスツリー

教職聴講が終了して、高校教員になり、結婚して、妻と初子とともに、クリスマスツリーを見にきたことがある。まだ、上田先生の授業の聴講生も始まっていない、大学院にも行っていない、教職聴講が終わって以来の何年ぶりかの立教訪問だった。懐かしい思いでいっぱいだった。その時は、まさか、その後、立教とずっと関わることになるとは夢にも思わなかった。今とちがって淡い光のイルミネーションをじっと見つめた。

ヒマラヤ杉も銀杏も、あの頃より少しは大きくなっただろうか。タイサンボクも無くなって久しいが、私が学生の頃は、5号館の4階5階から大

きな木の、大きな白い花を見下ろすことができた。

非常勤講師退職の年、授業後、偶然にもクリスマスツリーの点灯式に出くわした。思えば、20 数年間、毎年クリスマスツリーを見てきた。けれども、しばらくまた見られないな、と点灯式を感慨深く眺めていた。しかし、JICE の所員として、これからも見られる。あと何回見られるかは分からないが、見ることができる間は見ようと思う。

(明治学院大学教授・JICE 所員)